

日本語の「は」と「が」の動作主性

—日本人、二言語併用者、アメリカ人日本語教師/学習者の比較—

伊藤武彦 (東北大学教育学部)

外国人が日本語を学習する際に直面する困難の一つに、「は」と「が」の用法の区別の問題が挙げられる。「は」と「が」の問題は、国語学・日本語学においてさまざまな論議がなされ未だ定説が確立していないが、本研究では、「が」は主格を標示し動詞があらゆる動作の主体を主に示す助詞であるのに対して、「は」は、動詞に対する格関係を標示するのではなく文の主題を示すことが主な任務であると考え、この考えによれば、「が」が動作の主体(動作主)という意味的関係を明示するのは望み、**「は」は直接そのような動作主を標示しないことになる。**しかし、実際の言語運用において動作主と主題とが重なる確率はきわめて高いと思われる。そこで本研究では「は」と「が」の「動作主性」——能動文中で、その助詞の名詞句が動作主として選択される蓋然性——を日本人成人について調べることを第一の目的とする。

本研究の第二の目的は、「は」と「が」の動作主性を二言語併用者、外国人の日本語習得者・学習者について調べることである。第二言語(外国語)として日本語を組織的教授→学習場面において学習してきている日本語習得者・学習者は、家庭や社会の中での相互交渉を通して「自然に」日本語を獲得してきた二言語併用者に対して、「は」と「が」の動作主性について異なった反応パターンを持っているのだろうか。あるいは「は」と「が」の動作主性の反応パターンは、そのような学習経験の違いよりもむしろ、学習の到達点に関連するのであろうか。

本実験では、文法的手がかりとして「は」と「が」の2つの助詞を用いると同時に、非文法的手がかりとして生物名詞と無生物名詞を用いることにより、上記4群が、日本語の単文を理解する際に、どの程度非文法的手がかりに頼るかを明らかにする。

方法 被験者: 以下の4群、29名である。①日本語単一使用者群(日本人群)、8名: 日本人の留学生で滞在歴10ヶ月以下。②日英二言語併用者群、8名: 日本語を母語としながら、青年期以前より英語環境の中で生活しているbilingualの学生。③アメリカ人日本語教師群(日本語習得者群)、8名: 日本語または日本語専攻のアメリカ人大学院生で、Teaching

assistantとして大学の日本語教師をしている者。1〜3年間の在日経験を持っている。④アメリカ人日本語学習者群、8名: 大学の授業で日本語学習を始め一年以上の学習歴を持つアメリカ人学生。日本語の文法的知識はあるが、言語運用経験に乏しい。

刺激文: [助詞なし文]: 2つの名詞と1つの他動詞との組み合わせからなる助詞なし文。3つの語順(NVN, VNV, NVV)と3種の名詞の意味の組合せ(AA, AI, IA、----ただし、A: 生物, I: 無生物)による9文型を2文ずつ計18文。

[助詞あり文]: 助詞の組合せとして[が/φ][φ/が][は/φ][φ/は][は/が][が/は]の6種類(φは助詞を付けないことを示す)を、上の9文型と組合せた、計54文型を1文ずつ。

両方あわせ72個の単文をランダムに配置したセットが各被験者に提示される。(名詞は、ラクダ、ウマ、シカ、イヌ、カメ、サカナ、着しごむ、スプーン、鉛筆、ボール、箱、クレヨン、動詞は、なめた、押した、さわった、キスした、たたいた、かんだ)——を使用した。

手続き: 被験者に、名々の文に対して、動物のミニチュアと無生物のモノを使って演示するよう指示した。

結果と考察 助詞あり文の結果を中心に検討したい。

[が/φ][φ/が]の文型で「が」のついた名詞を動作主とした反応率をFig. 1に、[は/φ][φ/は]の文型で「は」のついた名詞を動作主とした反応率をFig. 2に、[は/が][が/は]の文型で「が」のついた名詞を動作主とした反応率をFig. 3.に示す。

[が/φ][φ/が]の文型では、4群とも「が」のついた名詞を動作主とみなす傾向が強い。その傾向に群間差があり、①群>②群>③群>④群の順に強い。「が」が前の名詞につくか後の名詞につくかによる差は③群以外の群にはみられなかった。[は/φ][φ/は]の文型でも、4群とも「は」のついた名詞を動作主とみなす傾向がみられた。この傾向は、4群間に有意差がなく、選択率は71%~85%の範囲に留まっている。[が/は][は/が]の両文型は、「が」の選択率に群間差がはげしい。[が/は]文型では①群(78%)、②群(67%)、③群(67%)

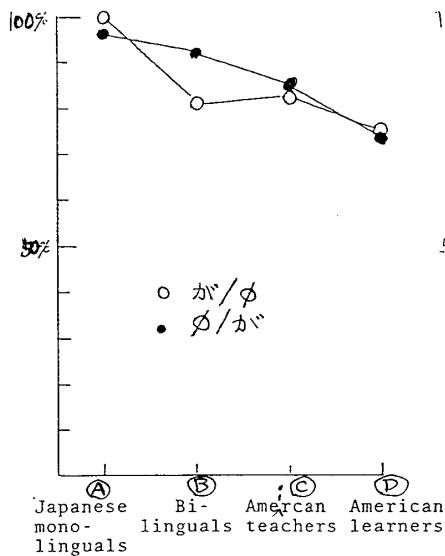


Fig. 1.

Percent choice of N+ga as agent in [ga/θ] and [θ/ga] sentence types

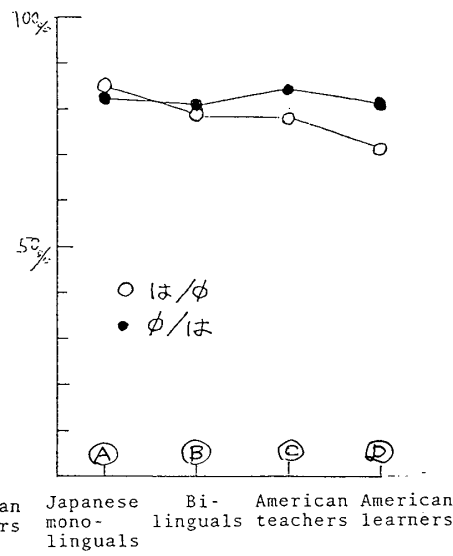


Fig. 2.

Percent choice of N+wa as agent in [wa/θ] and [θ/wa] sentence types

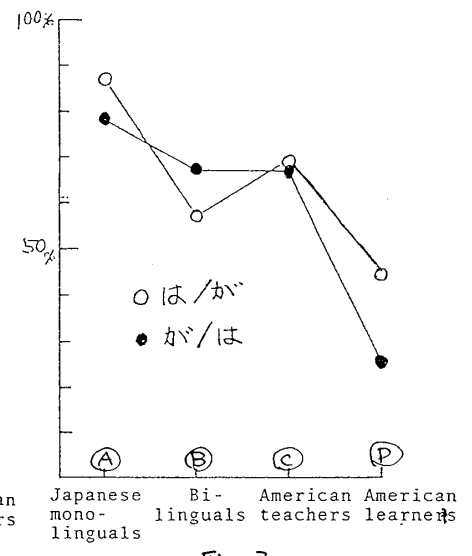


Fig. 3.

Percent choice of N+ga as agent in [wa/ga] and [ga/wa] sentence types

Table 1. Percent Use of Meaning Strategy in Each Particle Level

SUBJECT GROUPS	[ga/θ][θ/ga]		[wa/θ][θ/wa]		[ga/wa][wa/ga]		(助詞あり文) MEAN OF MARKED SENTENCES	(助詞なし文) MEAN OF UNMARKED SENTENCES	MEAN
	[ga/θ]	[θ/ga]	[wa/θ]	[θ/wa]	[ga/wa]	[wa/ga]			
Ⓐ Japanese Monolinguals	0	13	38	42	25	25	(24)	67	30
Ⓑ Bilinguals	42	25	34	42	41	42	(38)	69	42
Ⓒ American Teachers of Japanese Language	20	20	40	33	53	33	(33)	50	36
Ⓓ American Learners of Japanese Language	8	17	29	30	46	13	(24)	43	27
MEAN	18	19	35	37	42	28	(30)	58	34 (%)

たのに対し①群(25%)では有意に低かった。「は/が」文型では、①群(87%)と③群(69%)とでは、「が」選択率が有意に高かったが、②群(57%)と④群(44%)ではチャンスレベルの範囲内にあった。

日本語単一使用者群(①群)においては、「が」または「は」が文中に1個しかない場合には、「が」の動作主性は98%、「は」の動作主性は83%という結果であったし、両者が同一文中にあると「が」が動作主として選択される率(84%)が高い。すなわち、「が」の動作主性は「は」のそれよりも高いのである。意味方略使用率[(AI, IA文型におけるAの選択率-50%)×2]をTable 1. に示す。①群は文中に「は」が1個の場合には意味方略の使用が多い。

二言語併用者群(②群)においても、「が」の動作主性(87%)は「は」の動作主性(80%)よりも高いが、①群ほど「が」>「は」の傾向が強くない。「

は/は」[は/が]文型ではむしろ意味方略による動作主選択が助詞による選択を上まわっている。この群では、すべての文型にわたって意味方略が多用される。

アメリカ人日本語教師群(③群)の反応は②群に近いパターンを示している。「が」の動作主性(83%)は「は」の動作主性(81%)に近いが、両者が拮抗する時は、68%の割合で「が」を動作主とみなす。その場合意味方略使用率も高い。

アメリカ人日本語学習者群(④群)においては、「が」の動作主性(75%)と「は」の動作主性(76%)の間に差がない。「は/は」[は/が]文型においては、むしろ「は」の動作主性が強い。これは所動詞文(e.g. 私は日本語が話せる)の場合に「が」が対象格の働きをすることの拡張一般化によるものかもしれない。